



## 投稿

大山康郎

## 仕事の喜び

私が初めて仕事をしたのは、六十四年前の中学二年生の夏休みだった。いろんなことが頭に浮かんでくる。

三重県松坂市の駅前の純喫茶店でのアルバイトで、店の浜口さんご夫婦に親切にさせていただいたことを、きのうのように思い出す。

店をあける前に通路を掃除して、排水をした。玄関先の水道の蛇口にホースを取りつけ、植木に水やりをしていた時にマスターから「康君、康君」と声がかかった。

「植木によつては、水が多すぎて木のためによくない時があるよ、土が渴いているようであればやるように」と教えられた。私は、何も考えずに水やりをしていたのだった。これからは考えて、と思った。

水道のホースを片づけている時、奥さんのよし子おばさんが「木が水をもらって喜んでいるね」といってくれ、うれしかった。

次は何をしようか。

店にはいると、マスターがガラス戸のガラスをみがいていた。

「僕がやります」。  
マスターのやっていたのをみていたので、まず濡れ雑巾でガラスの表面のよごれをふきとり、そのあと、乾いた手拭いでガラスが透き通るまでみがいた。

「気持ちいいね。やったという感じだね！康君」とマスターがいつてくれた。

この時、今まで味わったことのない喜びを感じ、仕事をしてよかつたと思った。

お客さんとの思い出もたくさんある。マスターは戦争中には飛行機乗りだった。

お客さんには、陸上自衛隊明野駐屯地のヘリコプター専門の航空学校の教官がいて、松阪〜明野間を近鉄電車のローカル線で通っていた。電車の待ち時間をコーヒータイトムにしており、航空学校の制服制帽姿が格好よく、空の仲間のマスターとの会話は楽しそうだった。

そうかと思えば、物静かな定年

近い背の高いおじさんのお客さんにもよくしていただいた。

その人は、国鉄（現JR）の、街の人が管理部とよんでいたところに勤めていた。国鉄名松線で通勤していて、汽車の時間待ちに店に来てくれた。店の奥の席に座つて、いつも「新聞取つて」と頼むので、私はその人が来店すると新聞を持って行き、注文を聞いた。

飲み物はモカのホットコーヒードった。

ある時、突然その人が立ち上がり「マスター、マスター、いい少年が来たね。いつも新聞をみせてくれるし、ありがたいなあ。ところでマスターにお願ひがあるんだ」。

私の方をみて「私は、この店の前の管理部の二階の総務部の高橋です」と名乗った。マスターは知っていたのか「高橋部長さんですね」といった。

高橋さんは、私の方をみて「三時の休憩時に、このおいしいコーヒーをうちの部の四人にも」と注文した。

私は高橋部長に「明日の三時にお待ちしております」と答えた。

マスターは高橋部長に「コーヒーは熱くして、五人分ポットに入れますからよろしく願ひします」と話してくれた。

高橋部長は笑顔で「空のポットは私が帰りに代金と一緒に夕方にもつてくるからね」といつてくれた。

高橋部長さんはやさしい人だなあと思った。明日がたのしみだ。

(続く)